

木猪口。

大 差渡二寸六分半、高一寸七分、内コウ臺高二分、同差渡一寸三分、

小 差渡二寸四分、高一寸五分、内コウ臺高二分、同差渡一寸一分半、○中略

銀猪口。

大 徑二寸七分、總高二寸二分、内コウ臺高二分半、

小 徑二寸三分、總高一寸七分、内コウ臺高二分、○下略

〔風俗文選五紀行〕南行紀

李由許六

二日、聖夜ぶかく起て、非番の男を起す、煤氣たる行燈の影に、會津盆の打ひらめたるに、日野椀の壺皿、いとさびしげにつきすへたり、

〔三省錄後編二飲食〕天明年間、白川侯○松平定信の諭書に、○中略夕膳には煮物にても、平皿ものにてても、一つ

繪なくとも、何にても一つ可差出候、○下略

〔俗つれづれ〕「過ぎて善は親の意見悪きは酒

然るに此親父たる人は、格別の思入、常々子どもに言含めらるゝは、我無常時到りて、臨終の時節急なる時には言ふ事も難からむ、別の子細無し、唯酒を禁めて、月忌命日の齋非時にも、固く酒鹽の入りたる料理する事無く、家の内には壺、平皿の蓋も、盃に似たる物を置かず、門に禁酒の札を石に彫りて建つべし、此遺言より外なし、

〔槐記〕享保十一年霜月四日、御茶、○中略 平皿 四角 午 勞ニタマゴチャツメ サキ 海老 ○中略 御壺皿 四角 朱、半分、半分

ハ 黒、○下略

〔諸道聽耳世間猿三〕器量は見るに煩惱の雨舎り

是は御馳走尼御にもと、いひつゝ、箸をとりて、平皿の蓋とれば、小鯛の難波煮、○下略